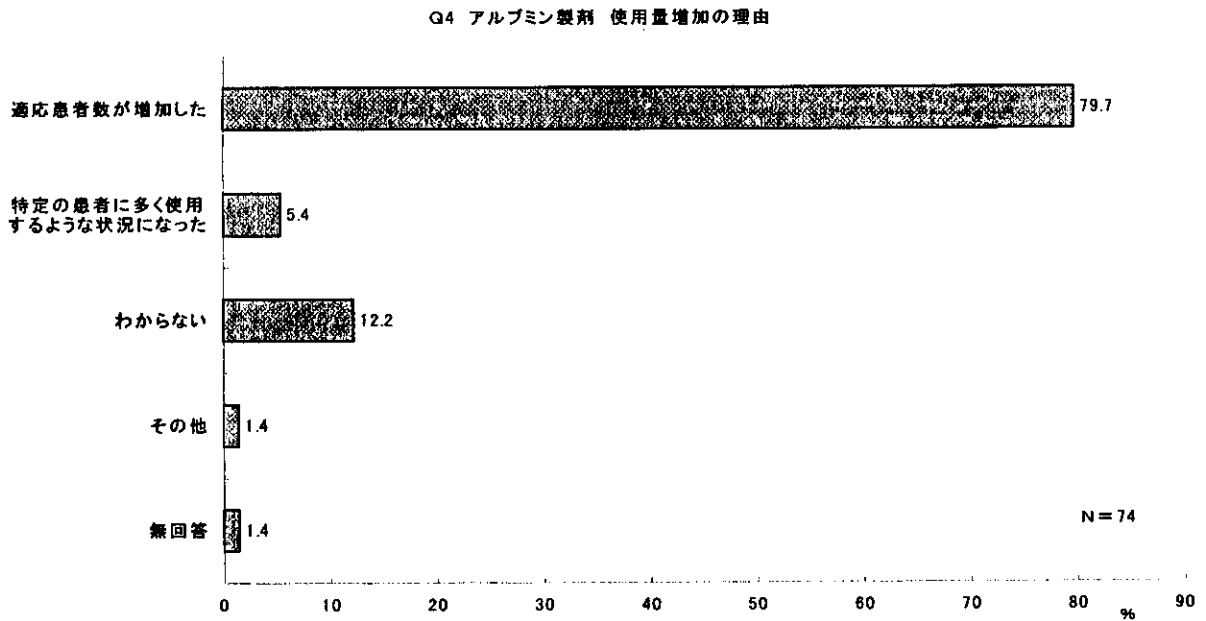
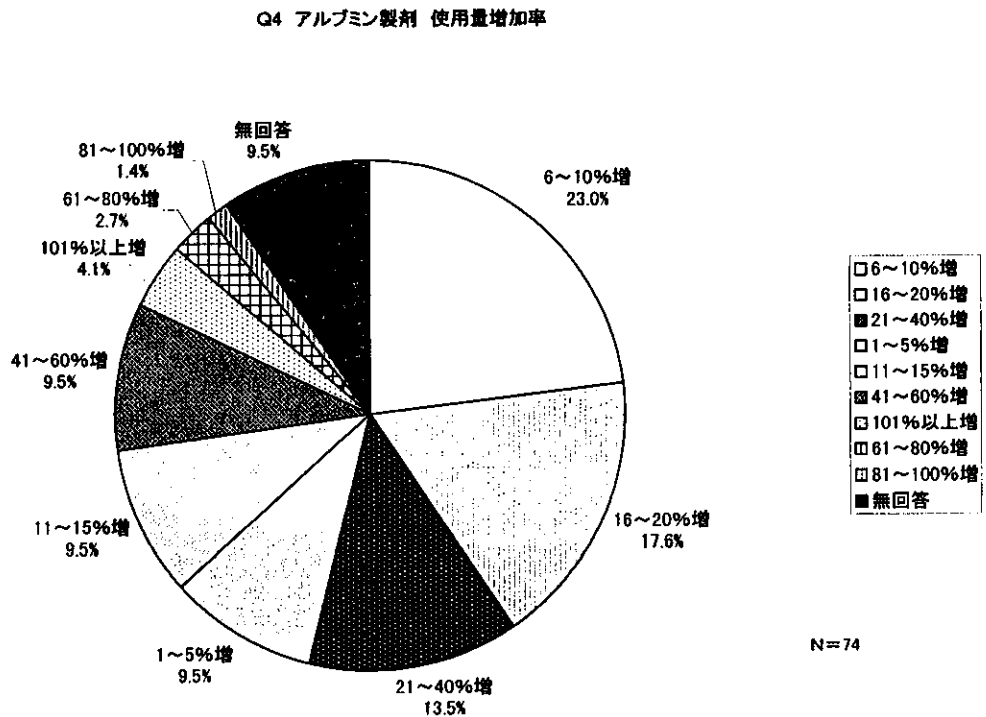


質問 4. 当該診療科でのアルブミン製剤の使用量が一昨年(平成 11 年)より増加した理由(MA、SA)

同剤の使用量が増加した理由については、「適応患者数が増加した」が全体の 79.7%を占めて最も多く、次いで「わからない」が同 12.2%、「特定の患者に多く使用するような状況になったから」が同 5.4%の順となった。

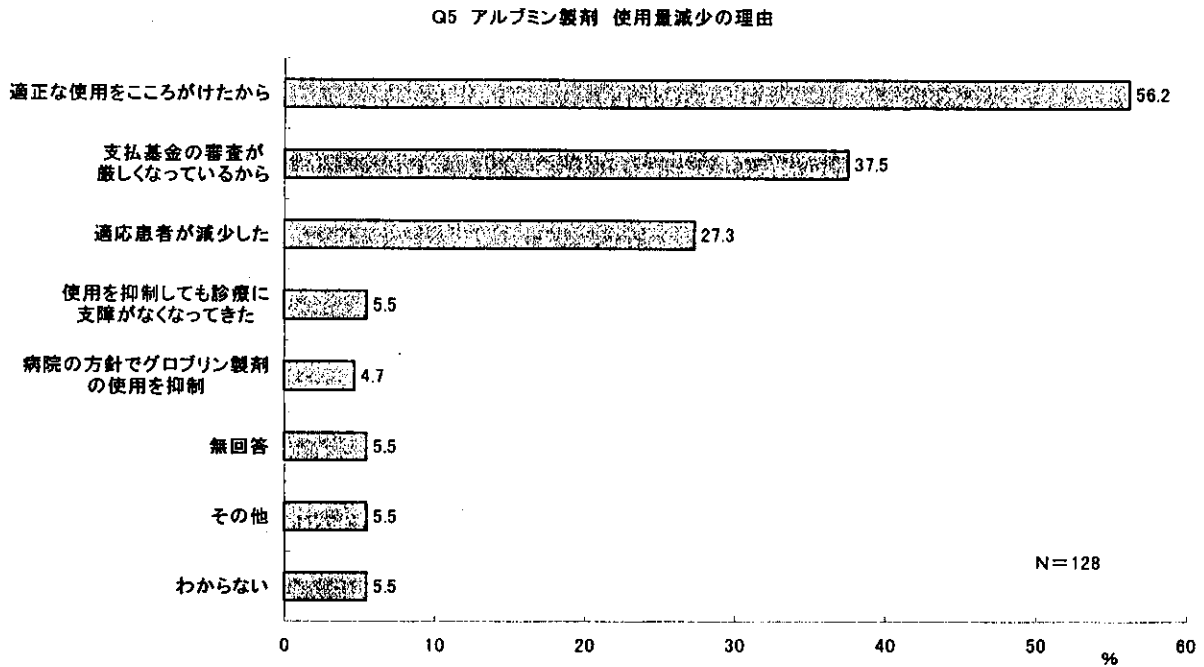


さらにどの程度増加したかということについては、「6~10%増」が全体の 23.0%を占めて最も多く、次いで「16~20%増」が同 17.6%、「21~40%増」が 13.5%の順となった。

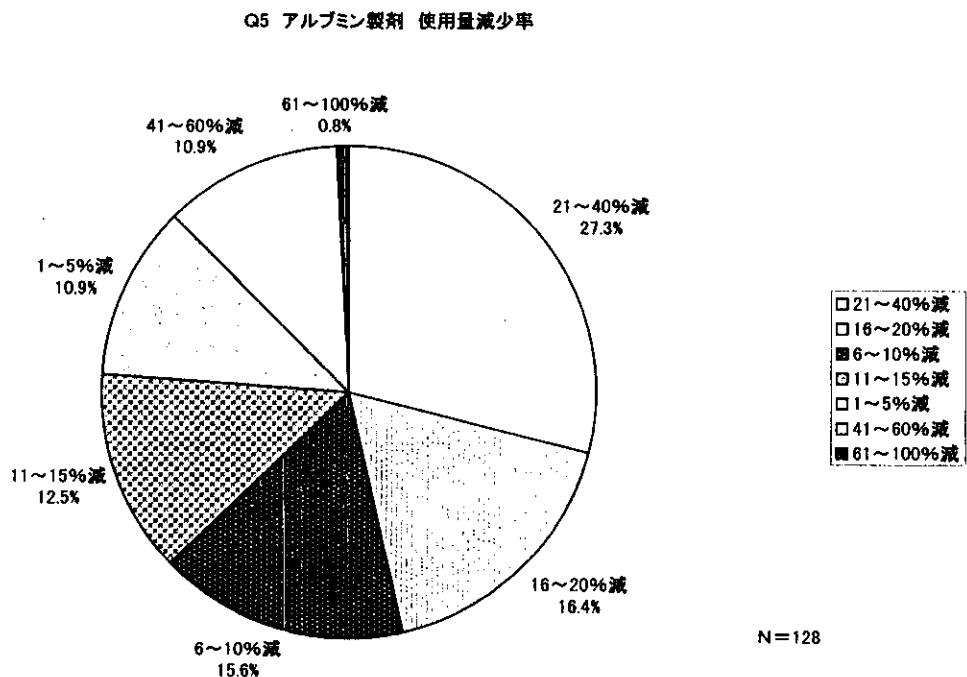


質問 5. 当該診療科でのアルブミン製剤の使用量が一昨年(平成 11 年)より減少した理由(MA, SA)

同剤の使用量が減少した理由については、「適正な使用をこころがけたから」が全体の 56.2% を占めて最も多く、次いで「支払い基金の審査が厳しくなっているから」が同 37.5%、「適応患者が減少した」が同 27.3%の順となった。



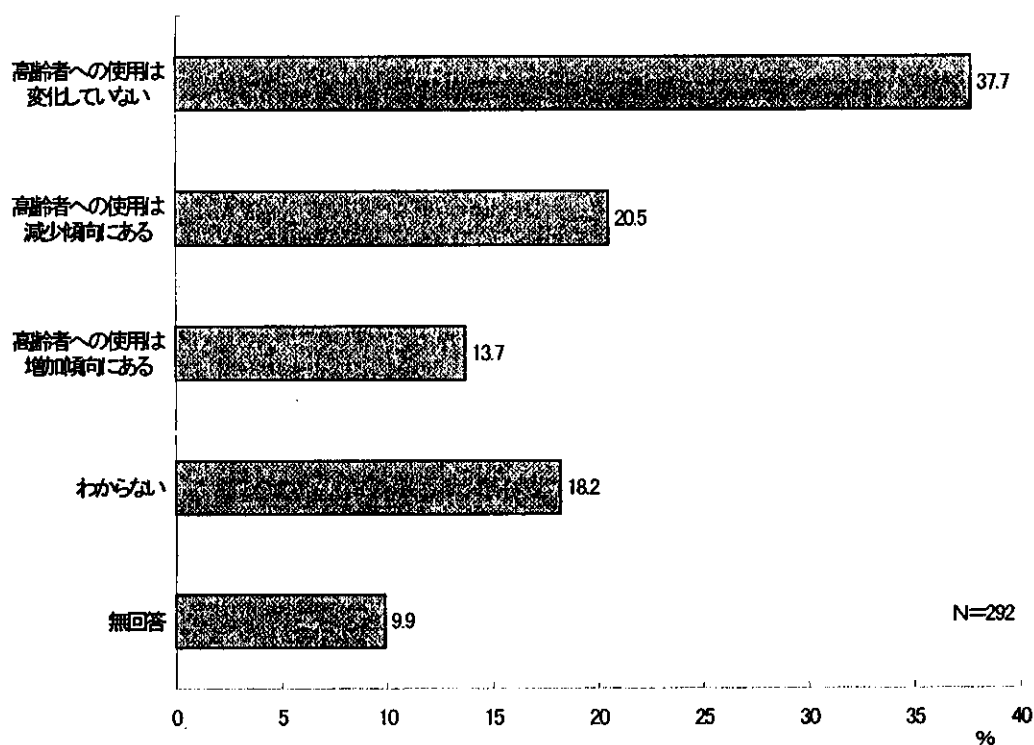
さらにどの程度減少したかということについては、「21~40%減」が全体の 27.3%を占めて最も多く、次いで「16~20%減」が同 16.4%、「6~10%減」が 15.6%の順となった。



### 質問 6. アルブミン製剤の高齢者(70 歳以上)への使用ということに対する感想(SA)

同剤を高齢者(70 歳以上)へ使用することに対しては、「高齢者(70 歳以上)への使用は変化していない」が全体の 37.7%を占めて最も多く、次いで「高齢者(70 歳以上)への使用は減少傾向にある」が同 20.5%、「高齢者(70 歳以上)への使用は増加傾向にある」が同 13.7%となった。

Q6 アルブミン製剤の高齢者への使用について

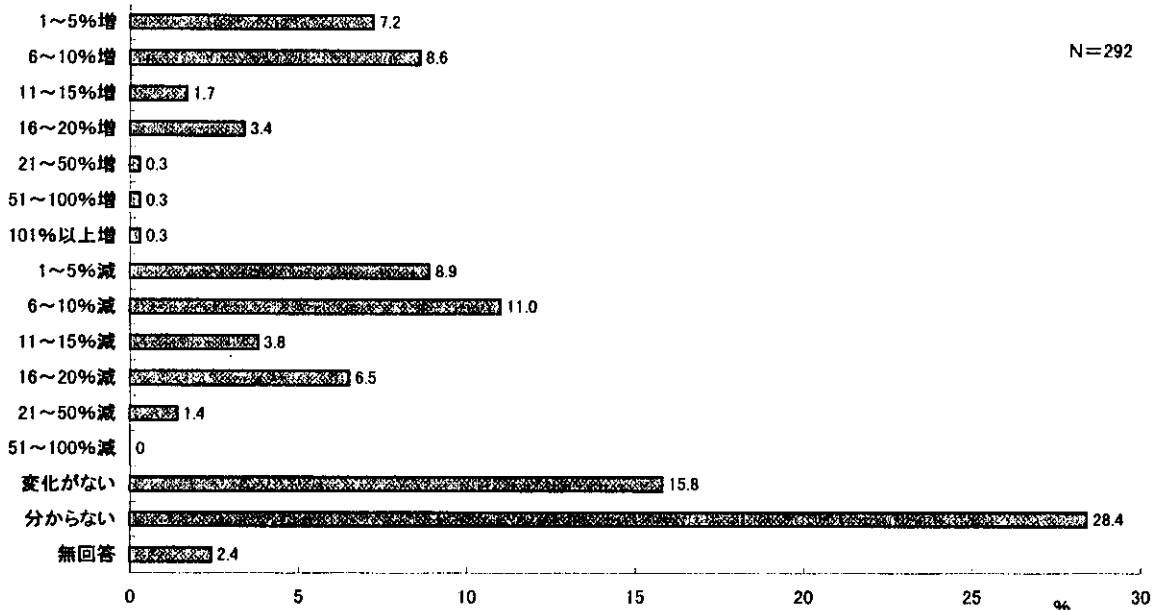


質問 7. 当該診療科におけるアルブミン製剤の使用量を現在の使用量を基準にした場合の今後 5 年及び 10 年後の変化(SA、MA)

5 年後の使用量変化予想

ここでは、「わからない」が全体の 28.4%を占めて最も多く、次いで「変化がない」が同 15.8%となった。具体的に数値で増減を予想したのでは、「6~10%減」が同 11.0%、「1~5%減」が同 8.9%、「6~10%増」が同 8.6%、「1~5%増」が同 7.2%の順となり、減少するとの回答が上位を占めた。さらに、「減少する」との答えは全体の 31.5%となり、「増加する」と回答した(同 21.9%)割合を上回った。

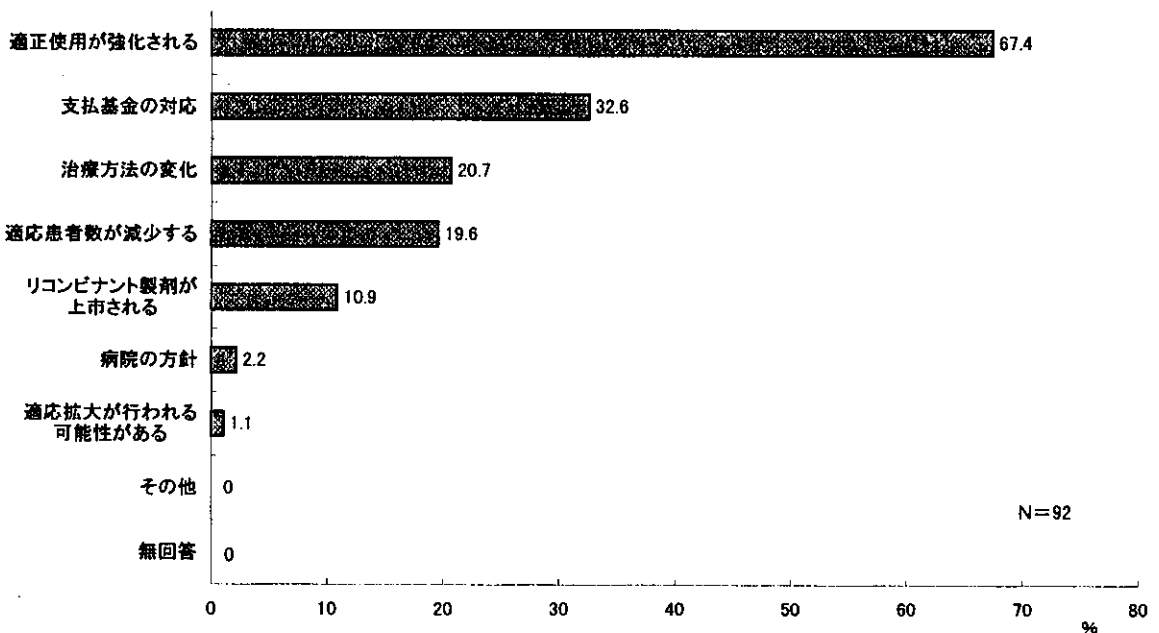
Q7 5年後のアルブミン製剤 使用量予想



変化に対する理由としては、以下のようになった。

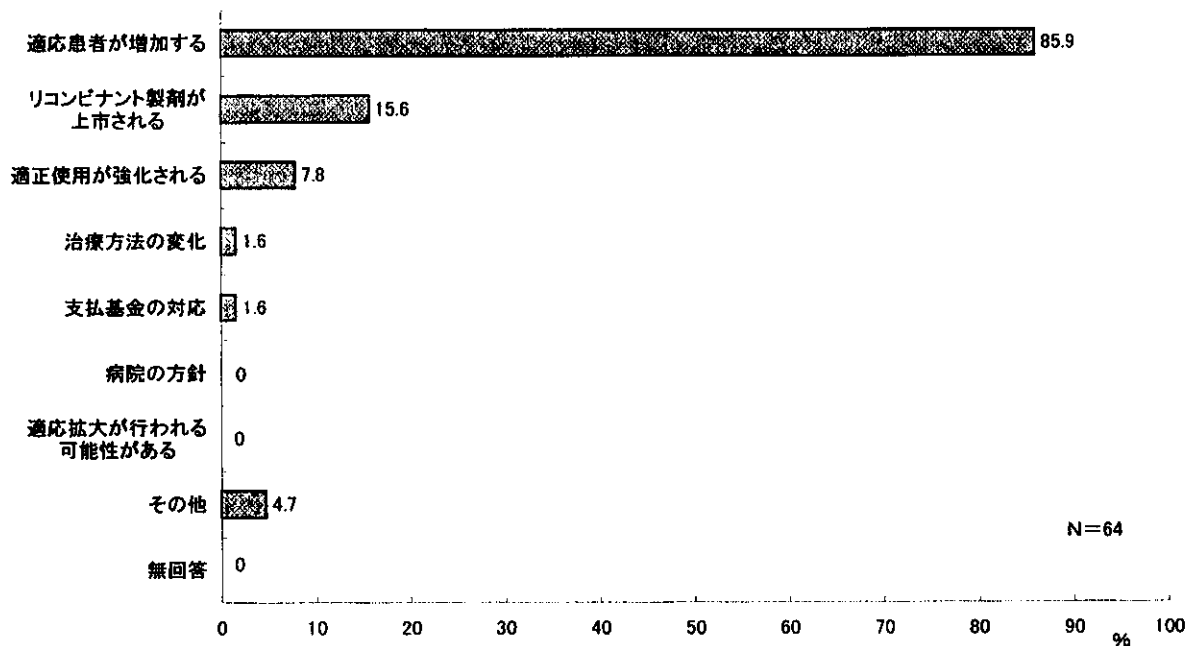
減少の理由としては、「適正使用が強化されることが予想されるから」が全体の 67.4%を占めて最も多く、次いで「支払い基金の対応」が同 32.6%、「治療方法の変化」が同 20.7%、「適応患者数が減少することが予想されるから」が同 19.6%の順となった。

Q7 5年後のアルブミン製剤 使用量変化の理由(減少の理由)



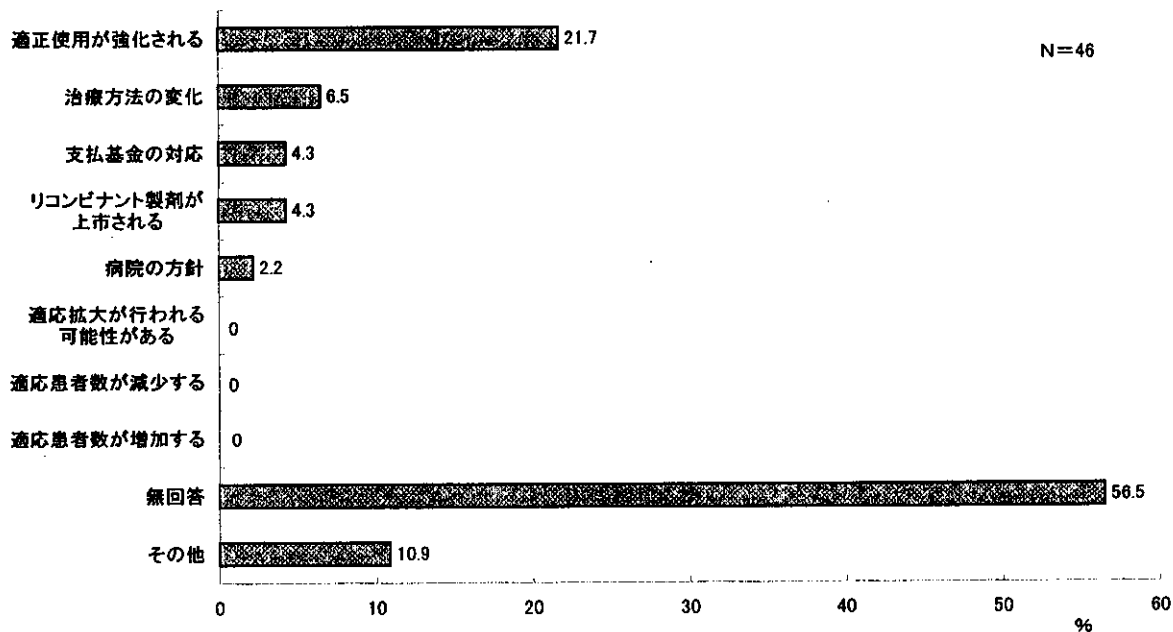
それに対して、増加の理由としては、「適応患者数が増加することが予想されるから」が全体の85.9%を占めて最も多く、次いで「リコンビナント製剤が上市されることが予想されるから」が同15.6%となった。

Q7 5年後のアルブミン製剤 使用量変化の理由(増加の理由)



また、「変化なし」の理由としては、「適正使用が強化されることが予想されるから」が全体の21.7%を占めて最も多く、次いで「治療方法の変化」が同6.5%の順となった。

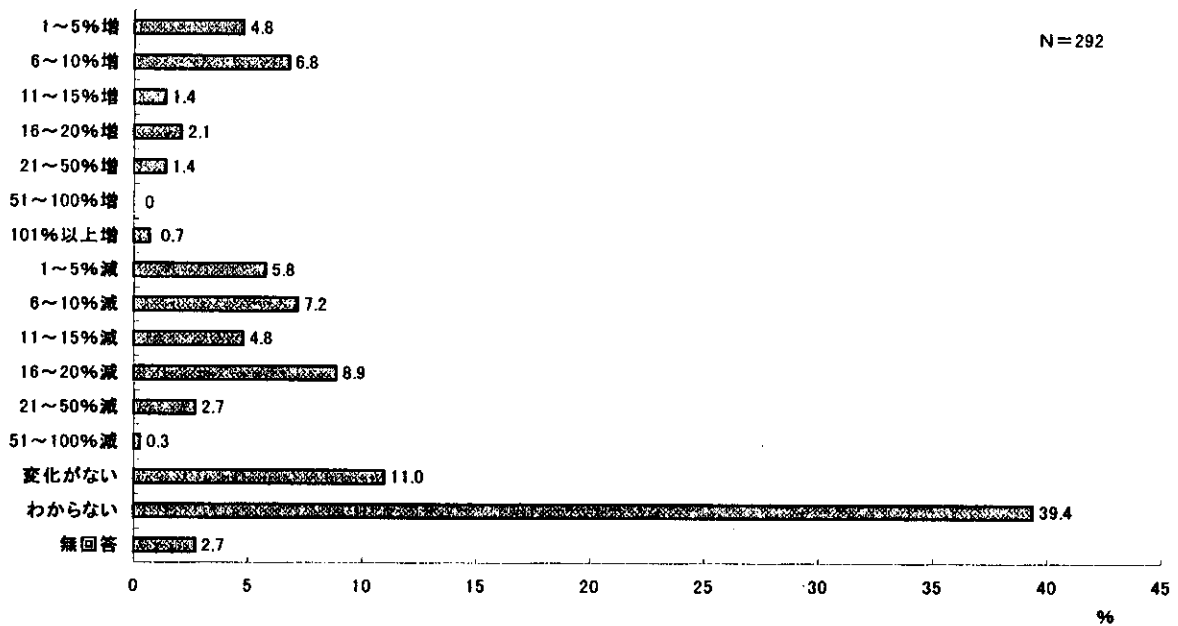
Q7 5年後のアルブミン製剤 使用量変化の理由(変化なしの理由)



### 10年後の使用量変化予想

ここでは、「わからない」が全体の39.4%を占めて最も多く、次いで「変化がない」が同11.0%となった。具体的に数値で増減を予想したのでは、「16~20%減」が同8.9%、「6~10%減」が同7.2%、「6~10%増」が同6.8%、「1~5%減」が同5.8%の順となり、減少するとの回答が上位を占めた。さらに、「減少する」との答えは全体の29.8%となり、「増加する」と回答した(同19.2%)割合を5年後の使用予想と同様に上回った。

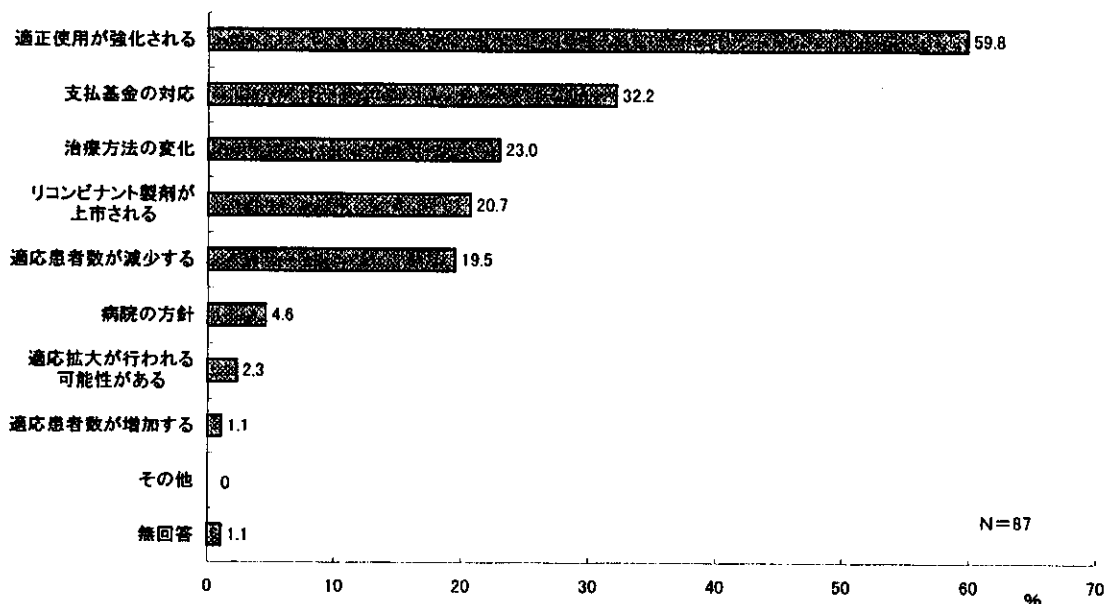
Q7 10年後のアルブミン製剤 使用量予想



変化に対する理由としては、以下のようになった。

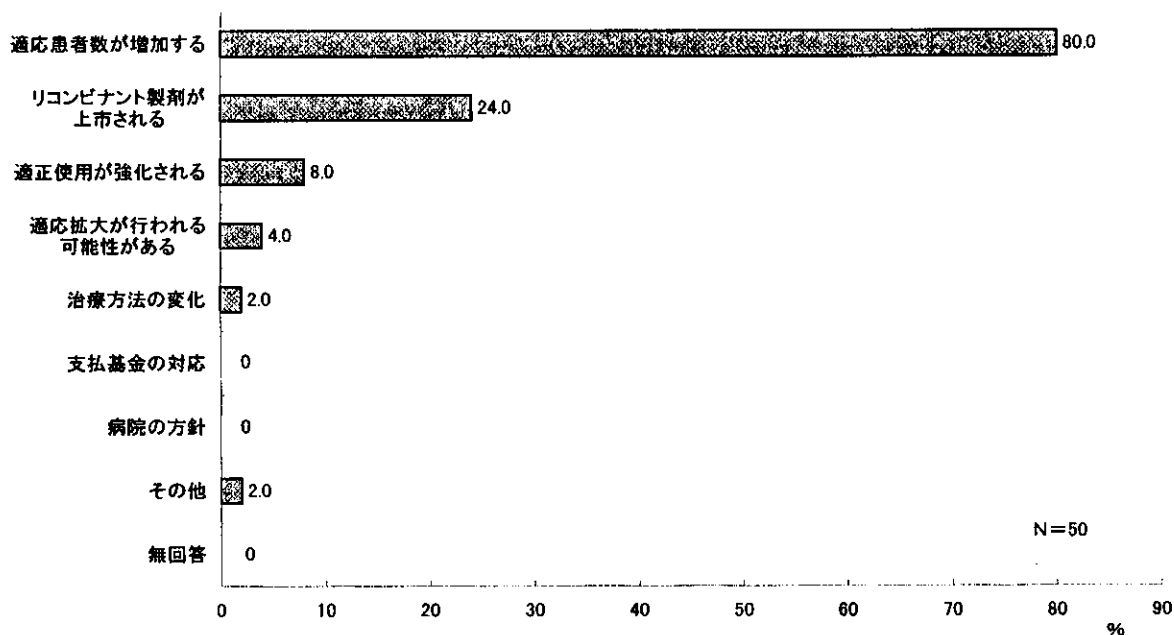
減少の理由としては、「適正使用が強化されることが予想されるから」が全体の59.8%を占めて最も多く、次いで「支払い基金の対応」が同32.2%、「治療方法の変化」が同23.0%、「リコンビナント製剤が上市されることが予想されるから」が同20.7%の順となった。

Q7 10年後のアルブミン製剤 使用量変化の理由(減少の理由)



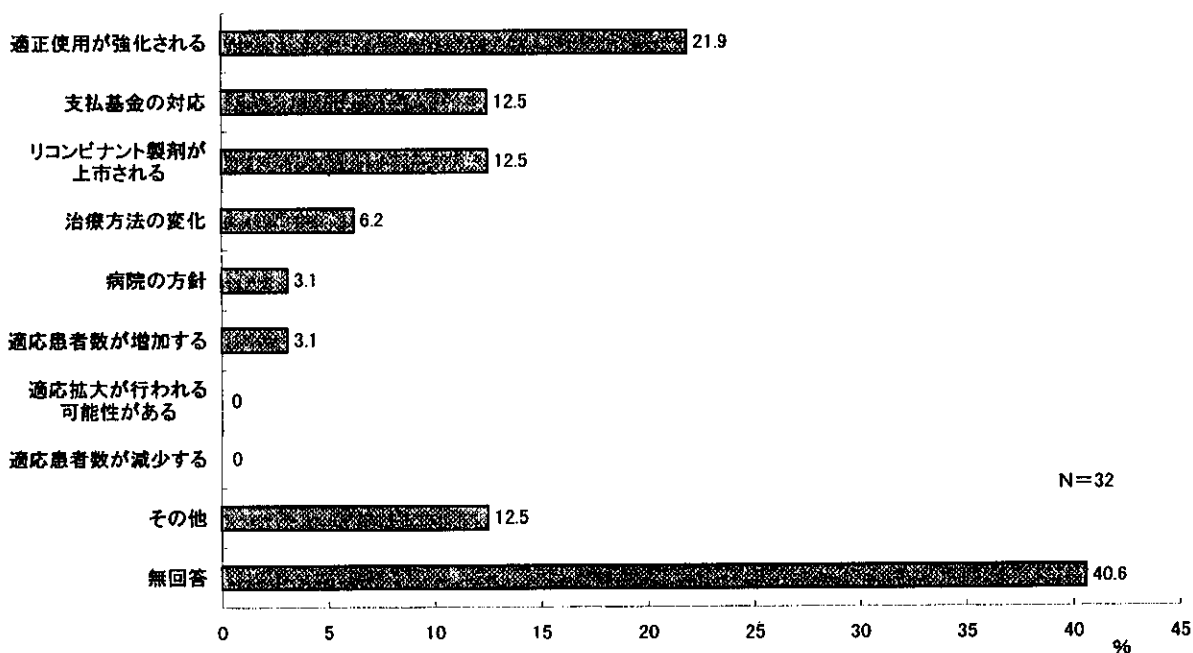
それに対して、増加の理由としては、「適応患者数が増加することが予想されるから」が全体の80.0%を占めて最も多く、次いで「リコンビナント製剤が上市されることが予想されるから」が同24.0%となった。

Q7 10年後のアルブミン製剤 使用量変化の理由(増加の理由)



また、「変化なし」の理由としては、「適正使用が強化されることが予想されるから」が全体の21.9%を占めて最も多く、次いで「支払い基金の対応」と「リコンビナント製剤が上市されることが予想されるから」が同12.5%の順となった。

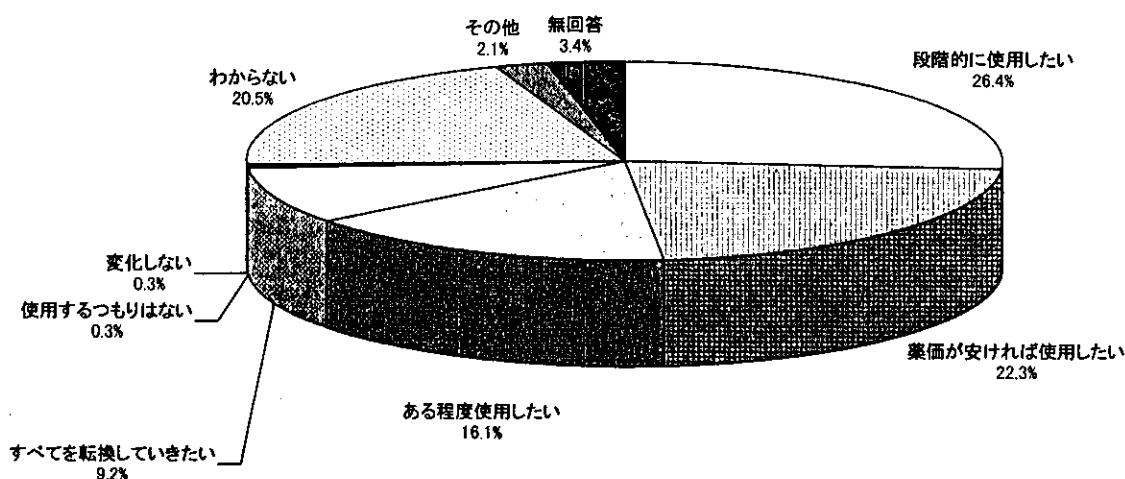
Q7 10年後のアルブミン製剤 使用量変化の理由(変化なしの理由)



### 質問 8. リコンビナント製剤が上市された場合の使用意向(SA)

リコンビナント製剤が上市された場合の使用意向については、「段階的にリコンビナント製剤を使用することにしたい」が全体の26.4%を占めて最も多く、次いで「薬価が安ければ、積極的に使用したい」が同22.3%、「わからない」が同20.5%となった。これを総使用量が30,000g以上の診療科を抽出しクロス集計すると、30,000g以上を100%とした場合では、「段階的にリコンビナント製剤を使用することにしたい」が全体の28.6%を占めて最も多く、次いで「薬価が安ければ、積極的に使用したい」が同23.2%となった。

Q8 リコンビナントが上市された場合の使用意向



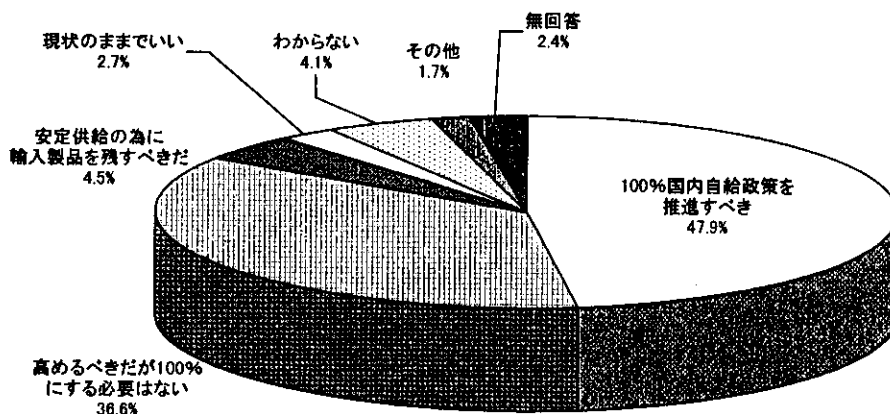
N=292

### 質問 9. 厚生労働省が血漿分画製剤の安全性、安定供給を目的に100%国内自給にする方針を打ち出したことに対する意見(SA)

100%国内自給を目指すという厚生労働省の姿勢に対しては、「100%国内自給政策を推進すべきだ」が全体の47.9%を占めて最も多く、次いで「国内自給は現在より高めるべきだが、100%国内自給にする必要はないが」36.6%となった。

また、これを総使用量別とクロスして見ると、30,000g以上使用する診療科を100%とした場合では、「100%国内自給政策を推進すべきだ」が全体の48.1%を占めて最も多く、次いで「国内自給は現在より高めるべきだが、100%国内自給にする必要はないが」35.2%となった。

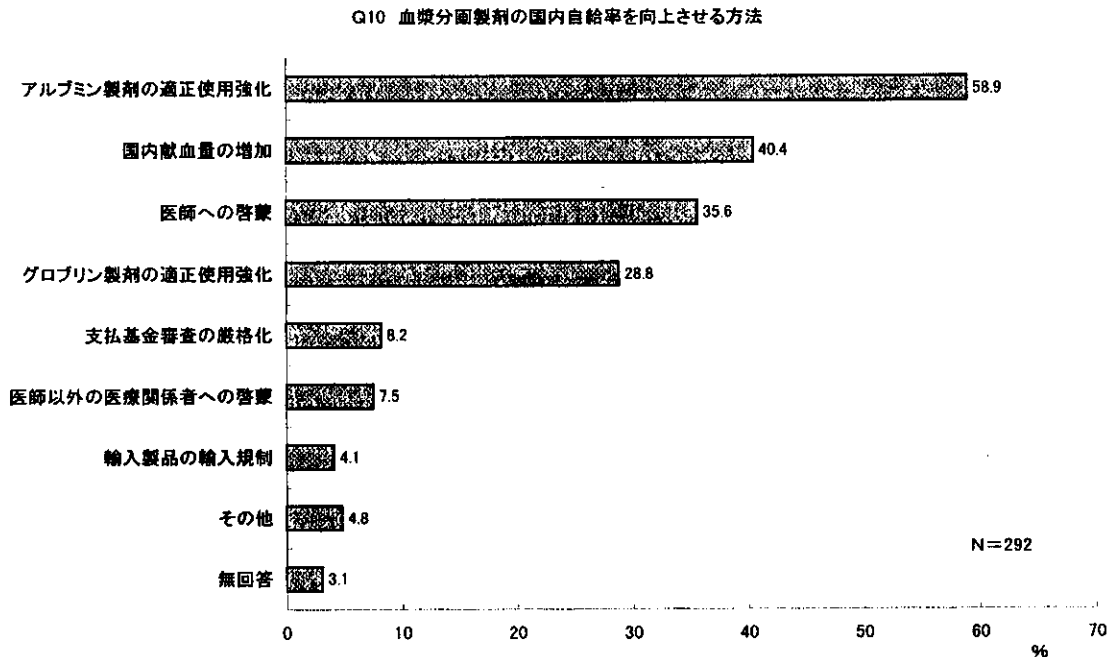
Q9 血漿分画製剤の100%国内自給について



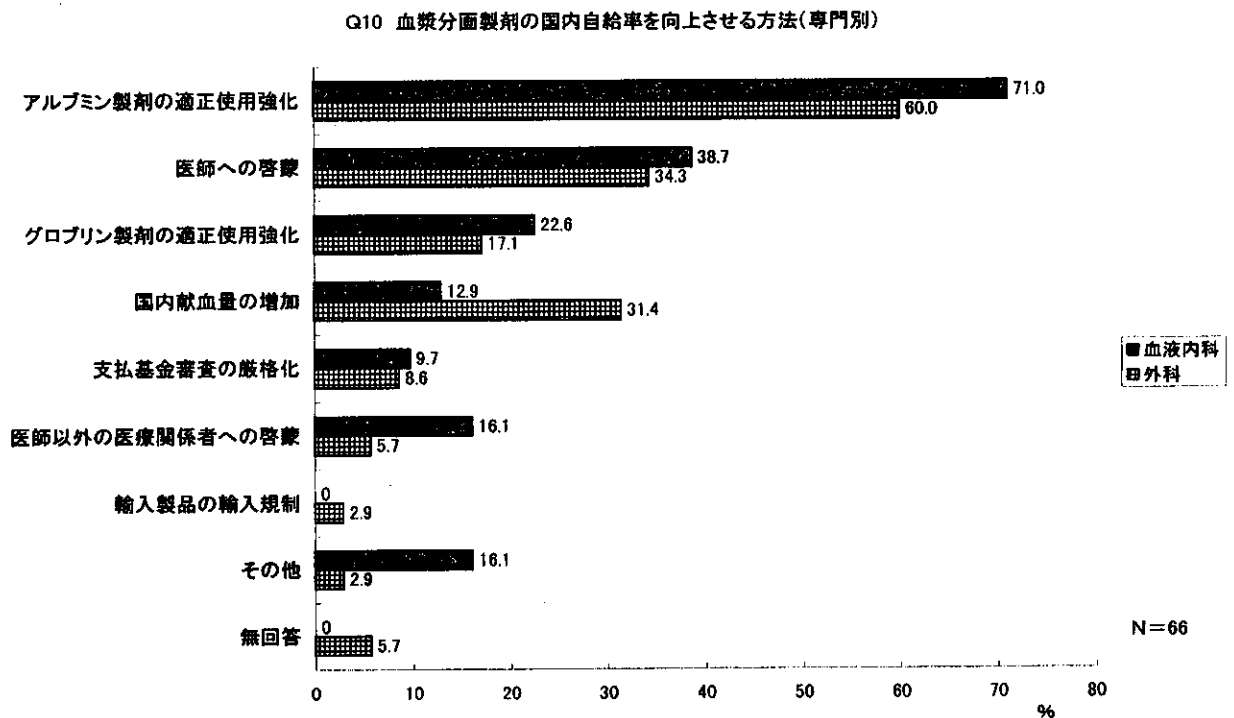


質問 10. 血漿分画製剤の国内自給率を向上させるための最も適切な方法(MA)

血漿分画製剤 100%国内自給に向けて、自給率を向上させる最も適切な方法としては、「アルブミン製剤の適正使用強化」が全体の 58.9%を占めて最も多く、次いで「国内献血量の増加」が同 40.4%、「医師への啓蒙」が同 35.6%、「グロブリン製剤の適正使用強化」が同 28.8%の順となった。



また、これを専門別とクロスして見ると、血液内科の場合は、「アルブミン製剤の適正使用強化」が全体の 71.0%を占めて最も多く、次いで「医師への啓蒙」が同 38.7%、「グロブリン製剤の適正使用強化」が同 22.6%の順となった。それに対して外科の場合は、「アルブミン製剤の適正使用強化」が全体の 60.0%を占めて最も多く、次いで「医師への啓蒙」が同 34.3%、「国内献血量の増加」が同 31.4%、「グロブリン製剤の適正使用強化」が同 17.1%の順となった。



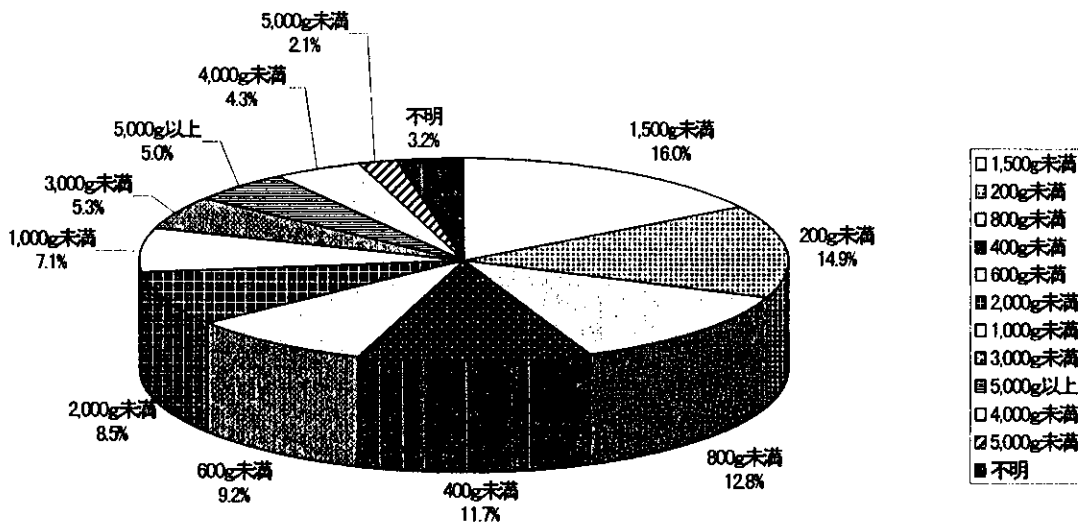
資料 5.

免疫グロブリン製剤についてのアンケート集計結果

質問 1. 診療科で平成 12 年度(平成 12 年 4 月～平成 13 年 3 月)に使用された静注免疫グロブリン製剤(以下グロブリン製剤)の量

同剤の量を総使用量換算に置き換えて見てみると、1,000 g 以上 1,500 g 未満が全体の 16.0% を占めて最も多く、次いで 200 g 未満が同 14.9%、600 g 以上 800 g 未満が同 12.8%、200 g 以上 400 g 未満が同 11.7% となった。ちなみに、平均使用量は 1,355 g となった。

Q1 平成12年度 グロブリン製剤総使用量

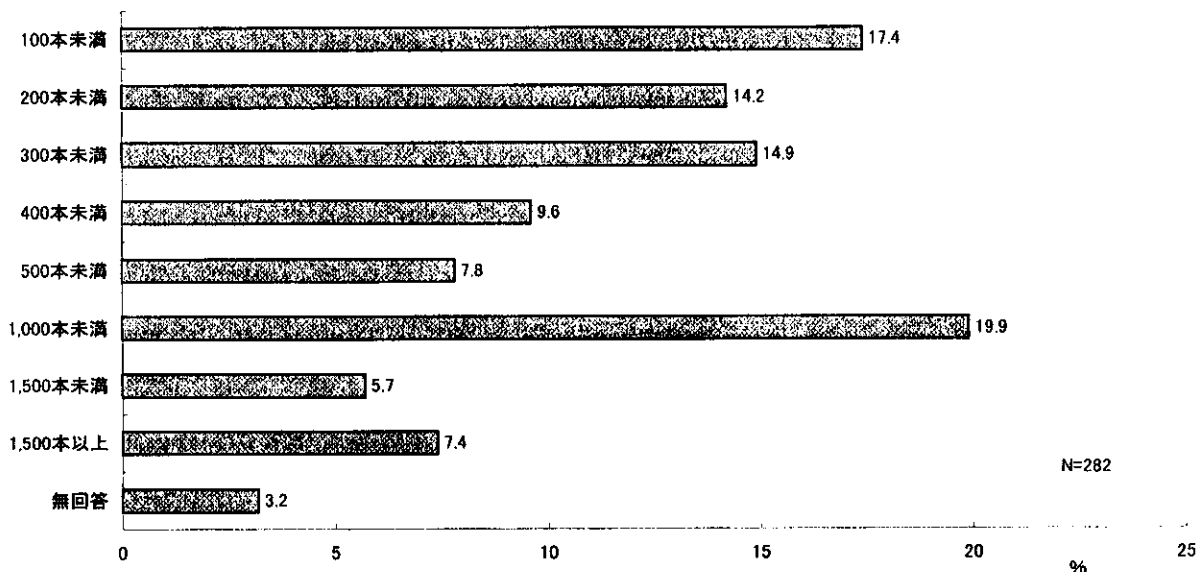


N=282

以下では、規格・単位別にそれぞれの動向について見てみる。

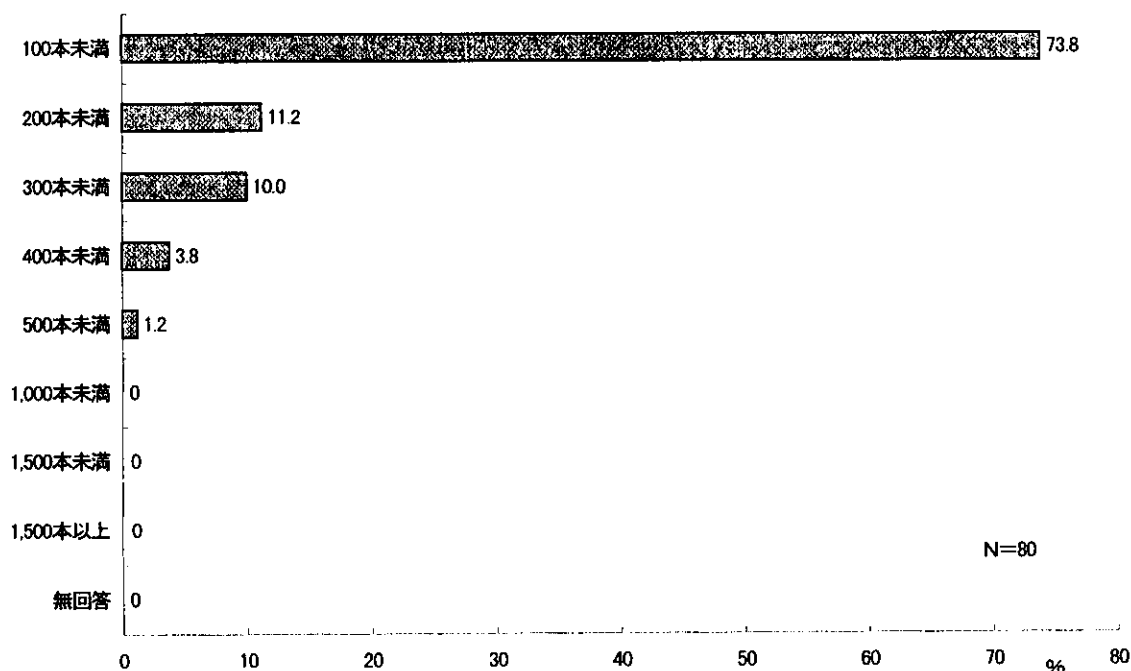
2.5 g 50mL では、500 本以上 1,000 本未満が全体の 19.9% を占めて最も多く、次いで 100 本未満が同 17.4%、200 本以上 300 本未満が同 14.9% となった。平均使用量は、536 本となった。なお、これを経営形態別に見ると、それぞれの平均使用量は、大学病院が 1,139 本、医療法人が 249 本、自治体病院が 391 本、国立病院が 701 本、社会保険関係団体が 343 本、日赤・済生会が 777 本となった。

Q1 グロブリン製剤使用量 2.5g 50mL



0.5 g 10mL では、100 本未満が全体の 73.8% を占めて最も多く、次いで 100 本以上 200 本未満が 11.2%、200 本以上 300 本未満が 10.0% となった。平均使用量は、88 本となった。なお、これを経営形態別に見ると、それぞれの平均使用量は、大学病院が 103 本、医療法人が 11 本、自治体病院が 87 本、国立病院が 82 本、社会保険関係団体が 184 本、日赤・済生会が 88 本となった。

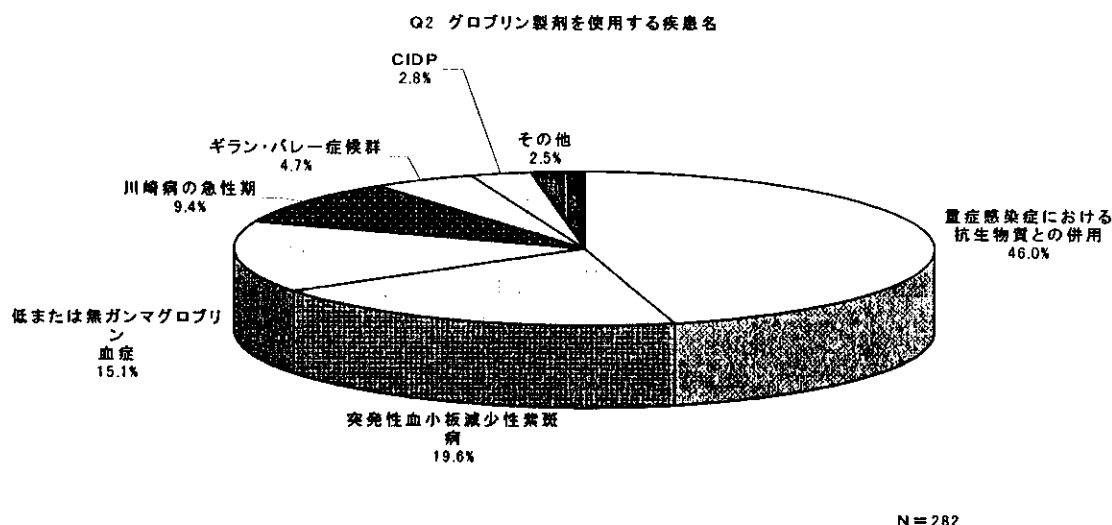
Q1 グロブリン製剤使用量 0.5g 10mL



## 質問 2. グロブリン製剤が主に使用される疾患(MA)

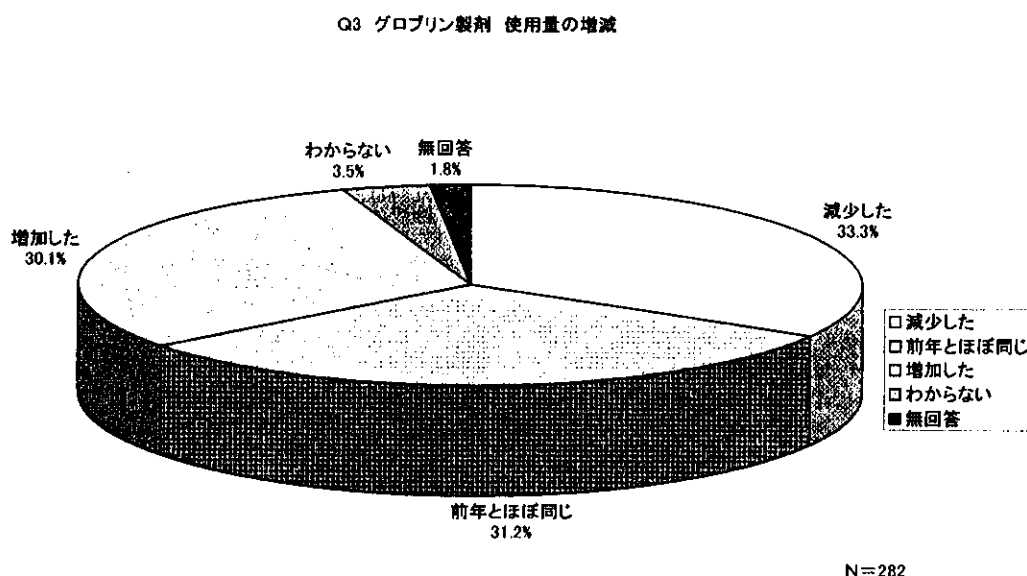
※最も多い疾患の場合=3点、2番目に多い疾患の場合=2点、3番目に多い疾患の場合=1点とし、その点数を加算し、合計して疾患別の順位を決定

当該診療科で同剤が主に使用される疾患は、「重症感染症における抗生物質との併用」が全体の46.0%を占めて最も多く、次いで「特発性血小板減少性紫斑病」が同19.6%、「低または無ガンマグロブリン血症」が同15.1%の順となった。



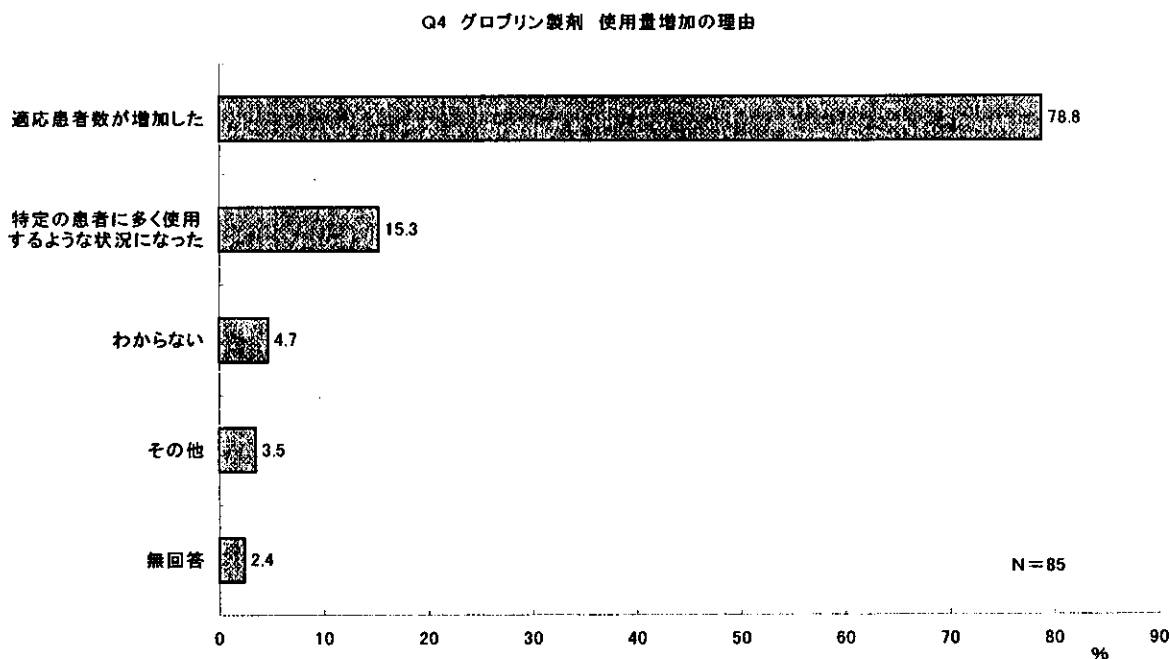
## 質問 3. 昨年1年間(平成 12 年)と一昨年(平成 11 年)のグロブリン製剤の使用量の比較(SA)

当該診療科における同剤の平成 12 年と平成 11 年の使用量を比較すると、「減少した」が全体の33.3%を占めて最も多く、次いで「前年とほぼ同じ」が同31.2%、「増加した」が同30.1%の順となった。

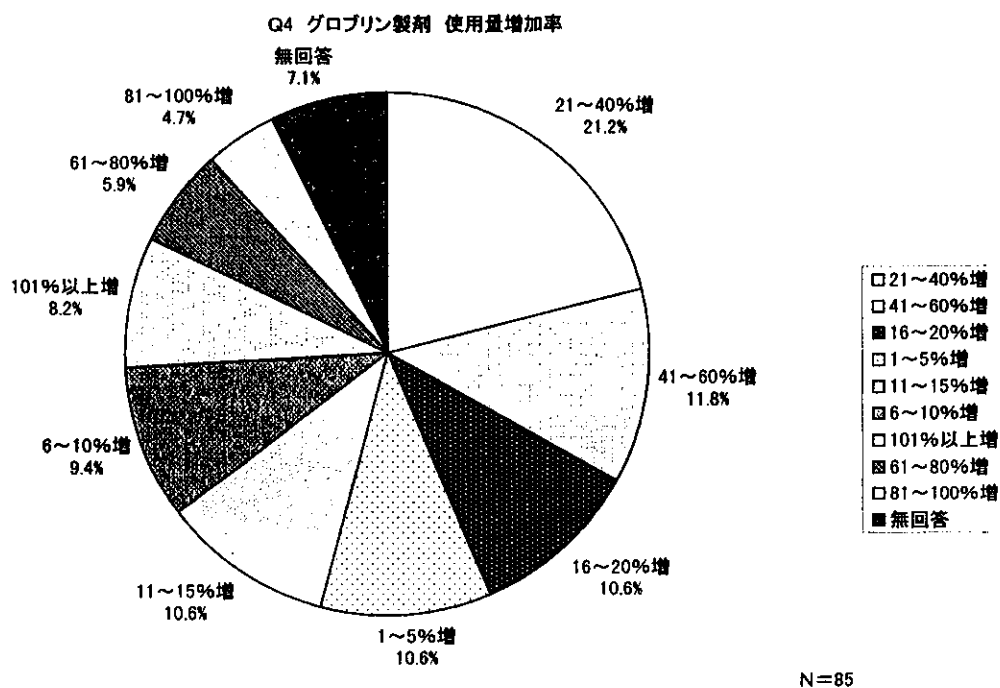


質問 4. 当該診療科での globulin 製剤の使用量が一昨年(平成 11 年)より増加した理由(MA, SA)

同剤の使用量が増加した理由については、「適応患者数が増加した」が全体の 78.8%を占めて最も多く、次いで「特定の患者に多く使用するような状況になったから」が同 15.3%、「わからない」が同 4.7%の順となった。

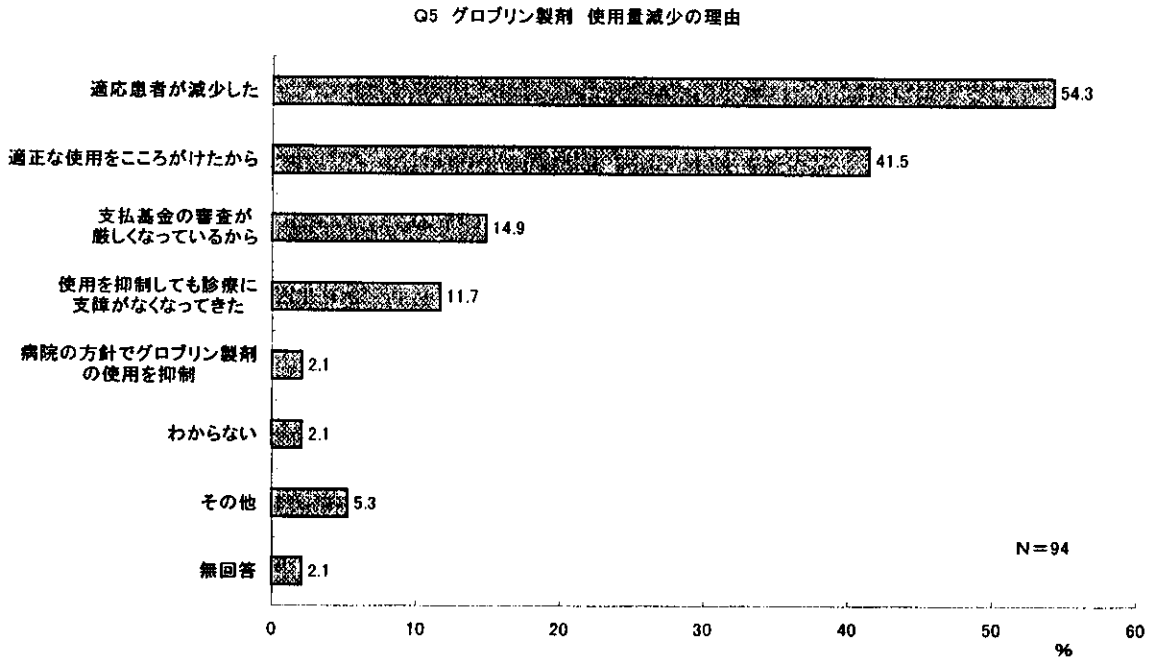


さらにどの程度増加したかということについては、「21~40%増」が全体の 21.2%を占めて最も多く、次いで「41~60%増」が同 11.8%の順となった。

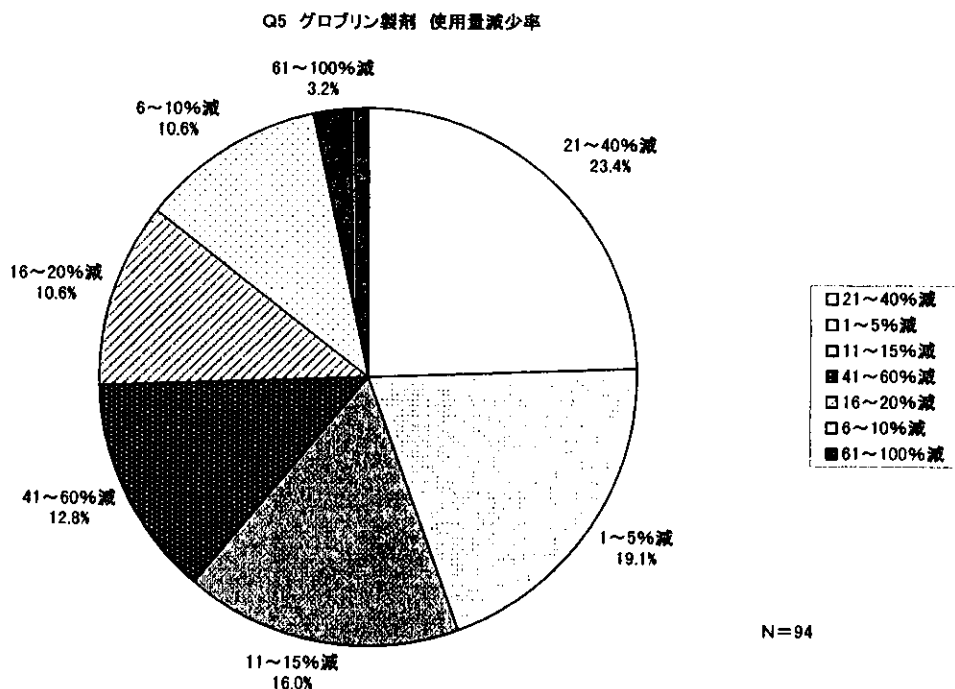


質問 5. 当該診療科でのグロブリン製剤の使用量が一昨年(平成 11 年)より減少した理由(MA、SA)

同剤の使用量が減少した理由については、「適応患者が減少した」が全体の 54.3%を占めて最も多く、次いで「適正な使用をこころがけたから」が同 41.5%、「支払い基金の審査が厳しくなってきたから」が同 14.9%の順となった。



さらにどの程度減少したかということについては、「21~40%減」が全体の 23.4%を占めて最も多く、次いで「1~5%減」が同 19.1%、「11~15%減」が 16.0%の順となった。

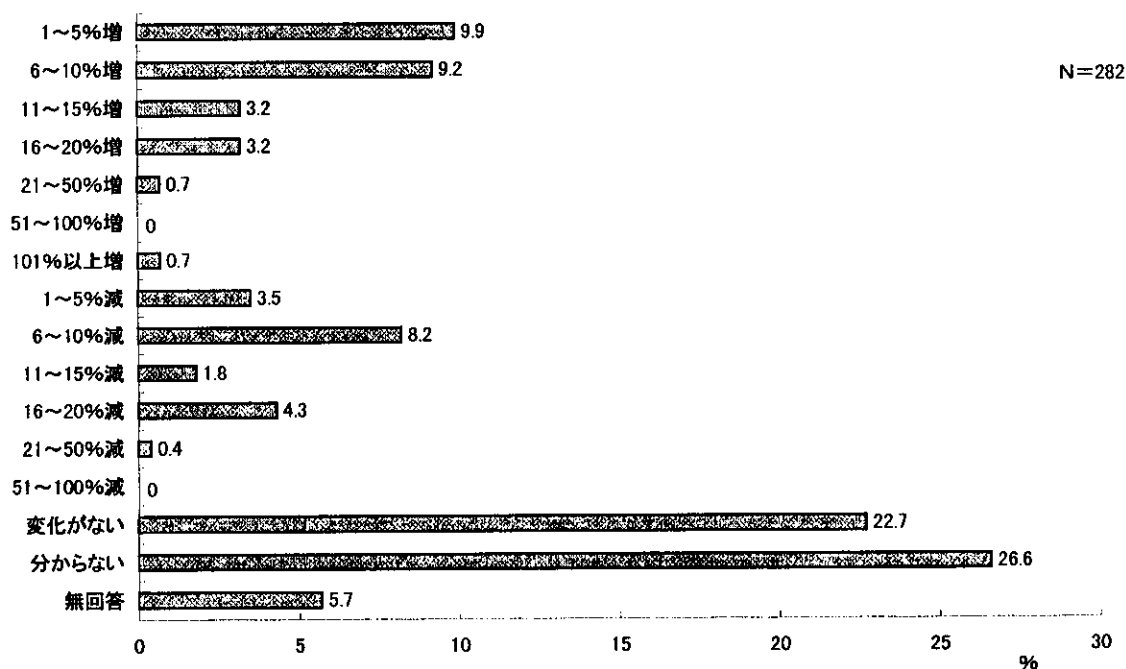


質問 6. 当該診療科におけるグロブリン製剤の使用量を現在の使用量を基準にした場合の今後 5 年及び 10 年後の変化(SA、MA)

5 年後の使用量変化予想

ここでは、「わからない」が全体の 26.6%を占めて最も多く、次いで「変化がない」が同 22.7%となった。具体的に数値で増減を予想したのでは、「1~5%増」が同 9.9%、「6~10%増」が同 9.2%、「6~10%減」が同 8.2%、「16~20%減」が同 4.3%の順となり、増加するとの回答が上位を占めた。さらに、「増加する」との答えは全体の 27.0%となり、「減少する」と回答した(同 18.1%)割合を上回った。

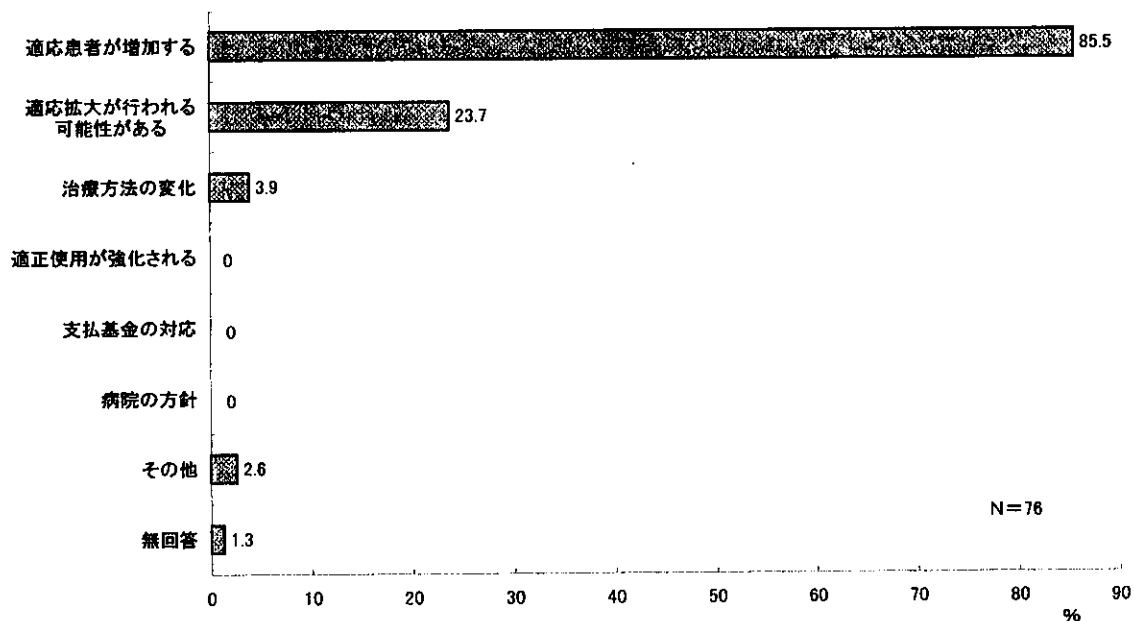
Q6 5年後のグロブリン製剤 使用量予想



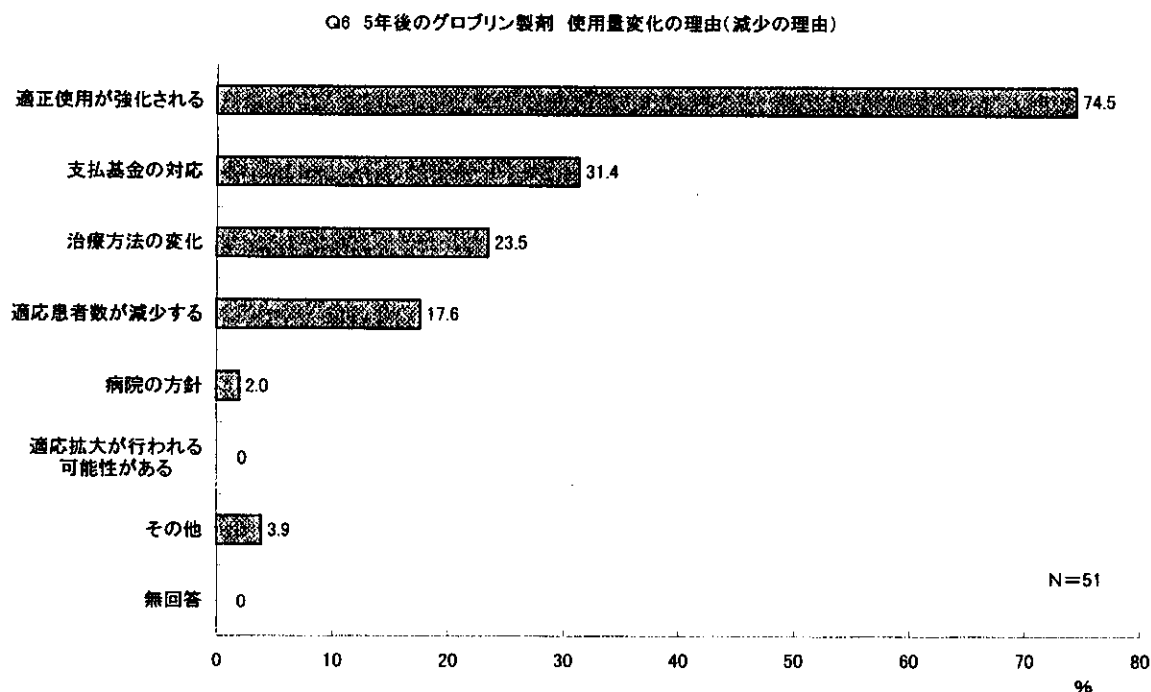
変化に対する理由としては、以下のようなになった。

増加の理由としては、「適応患者数が増加することが予想されるから」が全体の 85.5%を占めて最も多く、次いで「適応拡大が行われる可能性があるから」が同 23.7%の順となった。

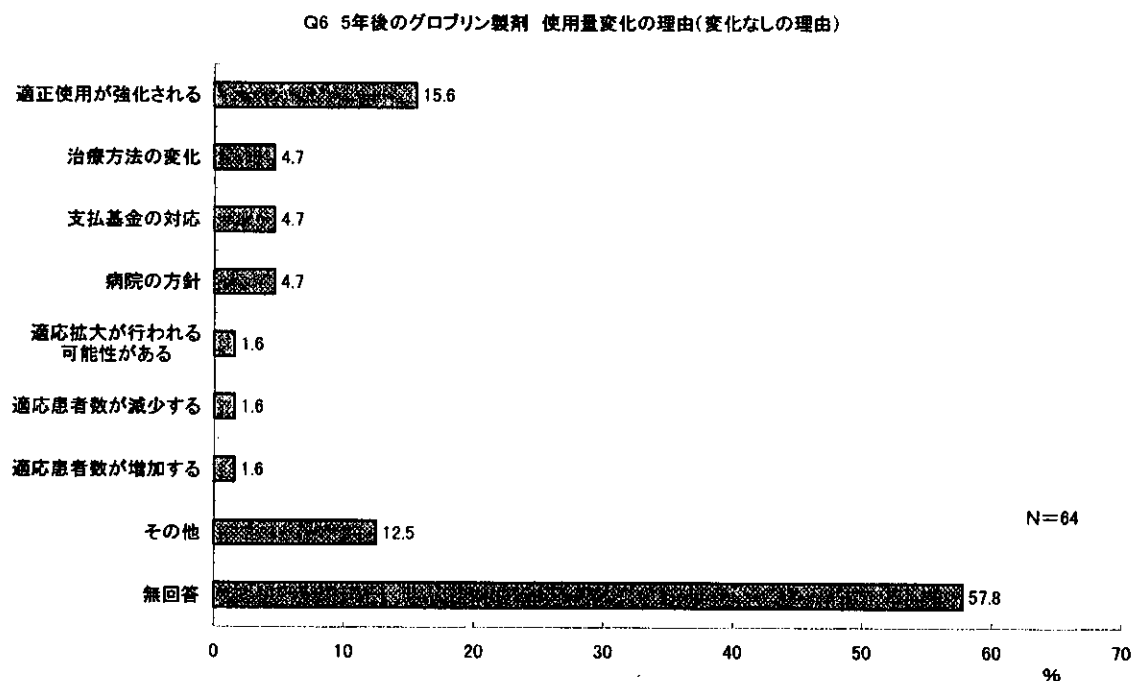
Q6 5年後のグロブリン製剤 使用量変化の理由(増加の理由)



それに対して、減少の理由としては、「適正使用が強化されることが予想されるから」が全体の74.5%を占めて最も多く、次いで「支払い基金の対応」が同31.4%、「治療方法の変化」が同23.5%となった。



また、「変化なし」の理由としては、「適正使用が強化されることが予想されるから」が全体の15.6%を占めて最も多く、次いで「病院の方針」、「支払い基金の対応」、「治療方法の変化」が同4.7%となった。

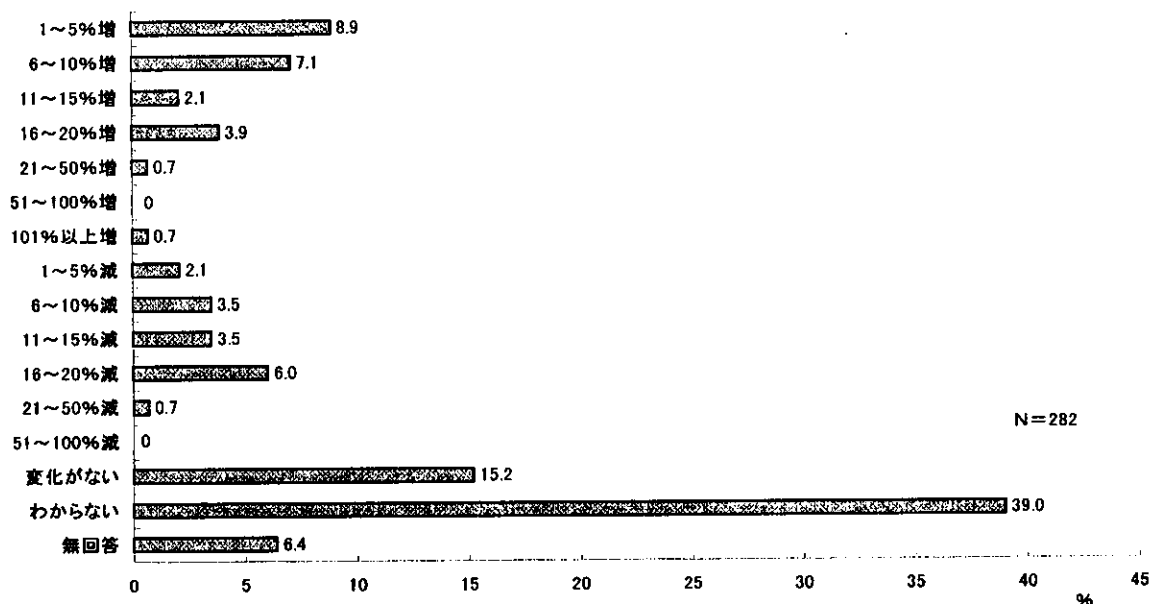




### 10年後の使用量変化予想

ここでは、「わからない」が全体の39.0%を占めて最も多く、次いで「変化がない」が同15.2%となった。具体的に数値で増減を予想したのでは、「1~5%増」が同8.9%、「6~10%増」が同7.1%、「16~20%減」が同6.0%、「16~20%増」が同3.9%の順となり、増加するとの回答が上位を占めた。さらに、「増加する」との答えは全体の23.4%となり、「減少する」と回答した（同16.0%）割合を5年後の使用予想と同様に上回った。

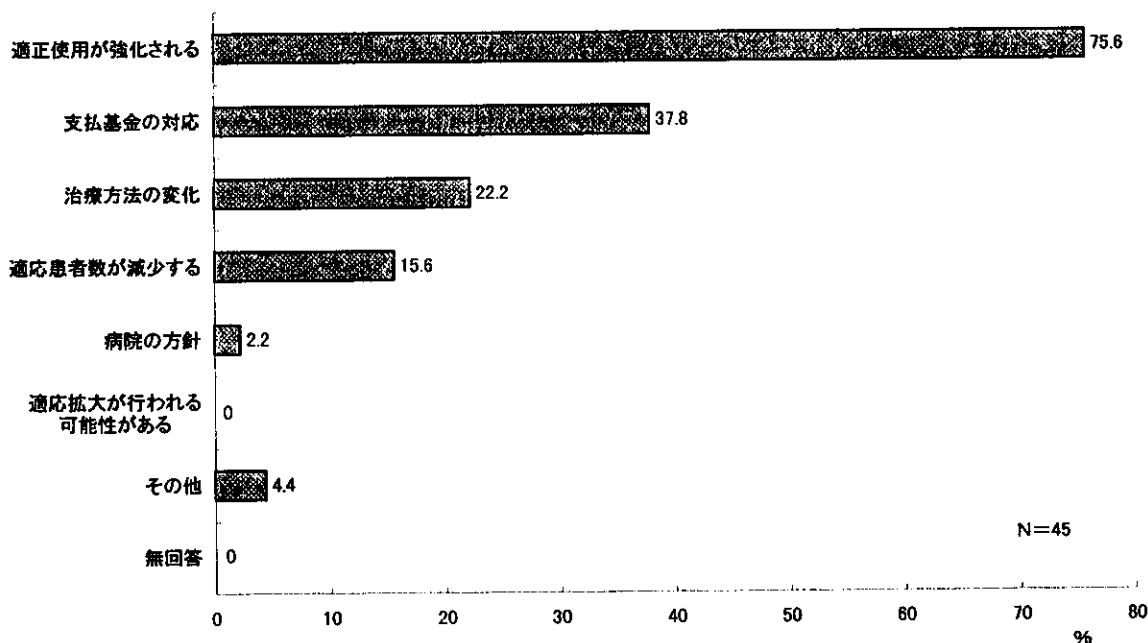
Q6 10年後のグロブリン製剤 使用量予想



変化に対する理由としては、以下のようになった。

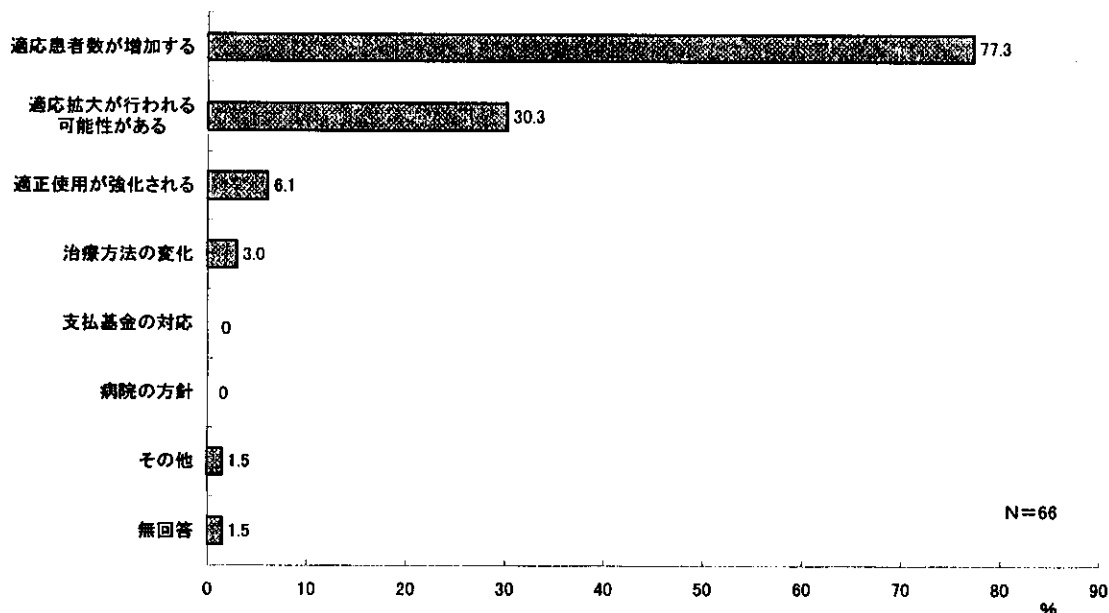
増加の理由としては、「適応患者数が増加することが予想されるから」が全体の77.3%を占めて最も多く、次いで「適応拡大が行われる可能性があるから」が同30.3%の順となった。

Q6 10年後のグロブリン製剤 使用量変化の理由(減少の理由)



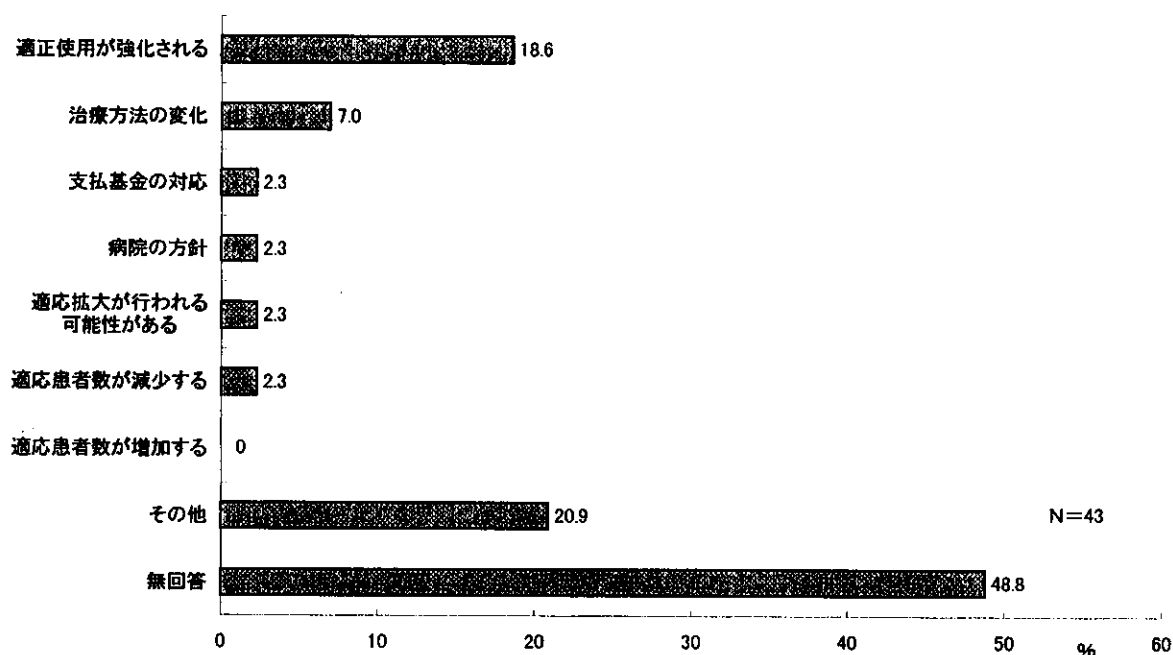
それに対して、減少の理由としては、「適正使用が強化されることが予想されるから」が全体の75.6%を占めて最も多く、次いで「支払い基金の対応」が同37.8%、「治療方法の変化」が同22.2%となった。

Q6 10年後のグロブリン製剤 使用量変化の理由(増加の理由)



また、「変化なし」の理由としては、「適正使用が強化されることが予想されるから」が全体の18.6%を占めて最も多く、次いで「治療方法の変化」が同7.0%の順となった。

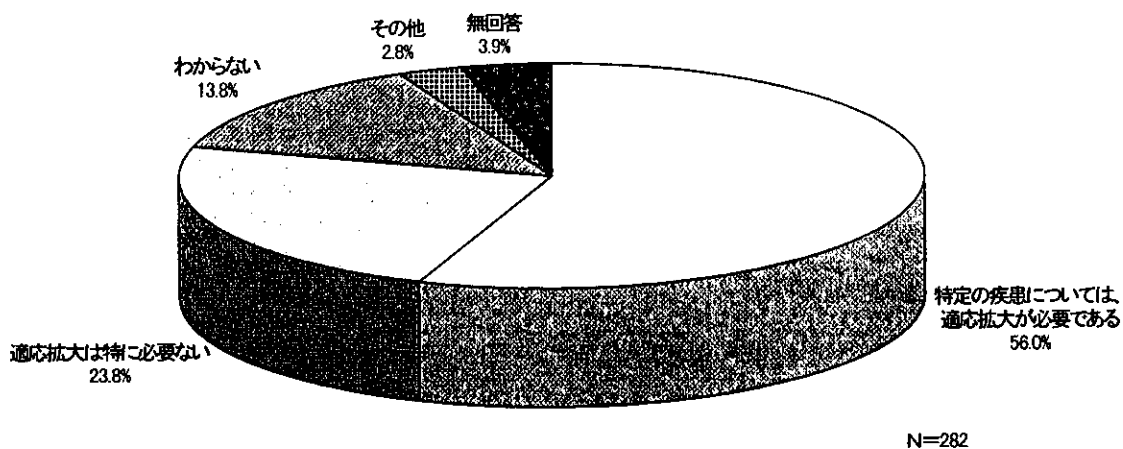
Q6 10年後のグロブリン製剤(変化なしの理由)



### 質問 7. グロブリン製剤の適応拡大に対する感想(SA)

同剤の適応拡大については、「特定の疾患については、適応拡大が必要である」が全体の 56.0% を占めて最も多く、次いで「適応拡大は特に必要ない」が同 23.8%、「わからない」が同 13.8% となった。

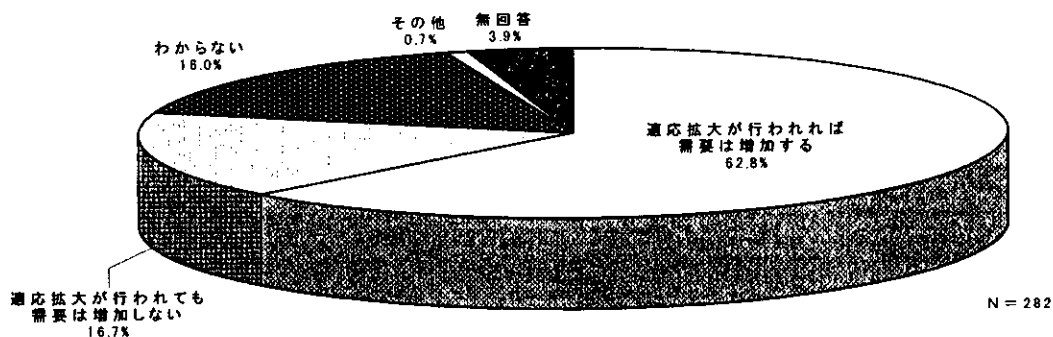
Q7 グロブリン製剤の適応拡大について



### 質問 8. グロブリン製剤の適応拡大が行われた場合の需要量変化(SA)

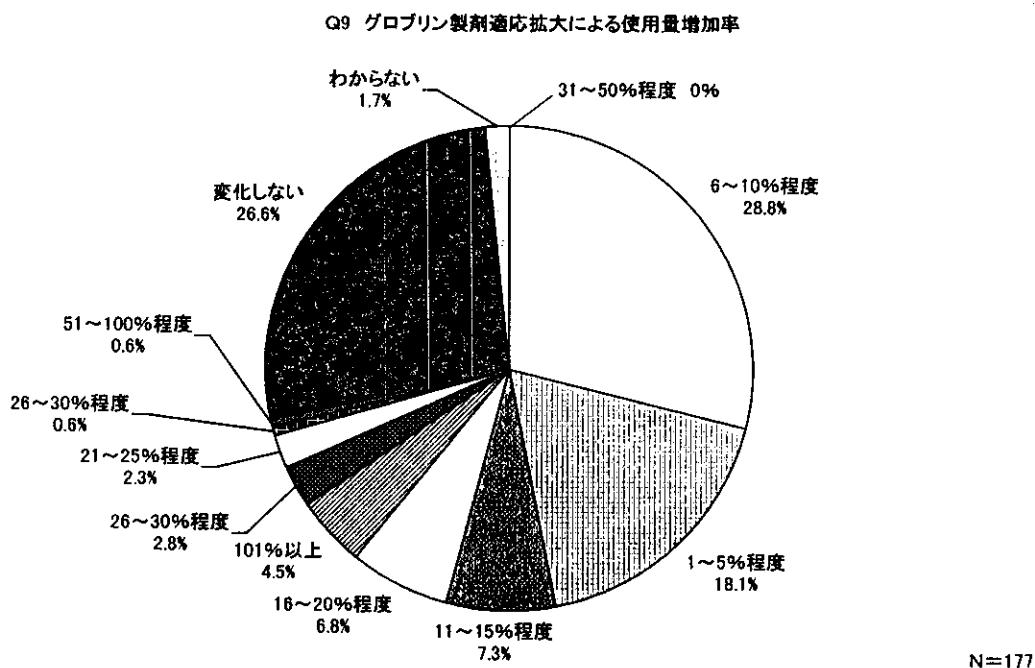
同剤の適応拡大が行われた場合、需要量がどのように変化するかということについては、「適応拡大が行われれば需要は増加する」が全体の 62.8% を占めて最も多く、次いで「適応拡大が行われても需要は増加しない」が同 16.7%、「わからない」が同 16.0% となった。

Q8 グロブリン製剤の適応拡大による需要量変化



質問 9. 「グロブリン製剤の適応拡大が行われれば需要が増加する」とした場合、当該診療科で使用される同剤の需要量の変化(SA)

同剤の適応拡大によって当該診療科において需要量がどのように変化するかについては、「6～10%程度増加する」が全体の 28.8%を占めて最も多く、次いで「変化しない」が同 26.6%、「1～5%程度増加する」が同 18.1%となった。



質問 10. グロブリン製剤の適正使用に対する感想(SA)

同剤の適正使用ということに対する感想については、「適正使用が推進されればグロブリン製剤の有効使用に貢献し、患者の治療に支障がない」が全体の 55.3%を占めて最も多く、次いで「適正使用が推進されればグロブリン製剤の有効使用に貢献することになるものの、患者の治療の幅を狭めることになる」が同 23.8%となった。

また、同質問に質問7をクロスさせると、「適正使用が推進されればグロブリン製剤の有効使用に貢献し、患者の治療に支障がない」を 100%とした場合には、「特定の疾患については、適応拡大が必要である」が全体の 57.1%を占めて最も多く、次いで「適応拡大は特に必要ない」が同 28.2%となった。

